

## 2019年度 大学の世界展開力強化事業学生派遣報告

### —中央大学校赤十字看護大学（韓国）との交流を通して—

西本大策<sup>1)</sup>, 八代利香<sup>1)</sup>

#### 和文要旨

2019年度大学の世界展開力強化事業として、学生6名と教員2名が韓国の中央大学校赤十字看護大学へ派遣された。学生は派遣テーマの①ルーラルナーシング、②グローバルリーダーシップ、③異文化理解に関し、考察することができていた。本稿では、その成果について報告する。

キーワード：韓国、ルーラルナーシング、グローバルリーダーシップ、異文化理解、ヘルスケアシステム

#### はじめに

鹿児島大学は、平成30年度「大学の世界展開力強化事業」に採択された。本事業は鹿児島をアジアの玄関口として、米国とアジア諸国の大学の三極連携を構築し、オンライン協働学習（Collaborative Online International Learning：以下 COIL と略す）等によって、世界的な課題や地域社会の持続可能な発展に取り組むことを目的としている。米国、アジア諸国の大学との三極連携により、協働で教育研究を行う課題解決型リサーチ・プログラム（上級）において、「文明と生態」分野の「島嶼へき地医療」コースを医学部が担っている。

鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻では、部局間学術交流協定校である韓国の中央大学校赤十字看護大学（Chung-Ang University：以下 CAU と略す）とのこれまでの鹿児島大学学生海外研修支援事業を活かしながら、米国の Berea College を含めた三極連携を構築し、「COIL 事前学習＋コース専門性に地域リソースを活用した実地体験＋日本人学生と協働学習」を実施している。平成30年度の「看護教育学」に引き続き、令和元年度は「国際看護学」の講義科目として事業に取り組んだ。本海外派遣のテーマは、異文化理解、グローバルリーダーシップ、ルーラルナーシングである。学生は4月に同科目で COIL を修了し、6月には韓国と米国から6名ずつの学

生と1名ずつの教員の計14名を受入れ、本学で学生交流プログラムを実施した。

今回、令和元年8月21日から30日までの10日間のプログラムで、本学の学生6名と教員2名が CAU へ派遣された。派遣の目的はルーラルナーシングの理念や変遷について理解し、離島・へき地におけるヘルスケアや看護の現状および看護師に求められている役割について学び、諸外国の現状を理解し説明できることであった。加えて、離島・へき地を含めた地域の保健医療関連施設の見学を通して、日本国内のへき地医療の現状や看護のあり方をグローバルな視点で再認識し、異なる文化を理解した上で看護全体のあり方や課題を考察する力を強化することであった。尚、本学と CAU は平成24年に部局間の学術交流協定を締結しており、締結前の派遣も含めると、今回で8回目の学生派遣となる<sup>1-6)</sup>。学生は、離島や都市部の公衆衛生施設や高齢者施設、外国人患者を受け入れる国際病棟を持つ病院、看護師の開業施設の視察および現地学生や教職員との交流を通して、本事業のテーマについて考察することができた。本稿では、本事業の派遣内容と学生の考察について報告する。

#### 派遣前の活動

今回の韓国への派遣に向けて、勉強会を企画した。具

<sup>1)</sup> 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻基幹看護学講座  
連絡先：西本大策  
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1  
Tel/Fax：099-275-6760  
E-mail：daisaku@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

体的には、令和元年5月から2ヶ月におよぶ計9回の課外勉強会を実施し、プレゼンテーションのテーマと内容構成の検討、ディスカッションの練習、派遣のしおりの作成等を行った。プレゼンテーションのテーマについては、「健康の社会的決定要因 確かな事実の探求 第二版」<sup>7)</sup>を参考に、社会格差、ストレス、幼少期、社会的排除、労働、失業、社会的支援、薬物依存、食品、交通をテーマの候補に挙げた。学生はテーマを選択し、日本や鹿児島が抱える保健課題について学習および整理を行い、英語でのプレゼンテーションに向けて準備を行った。派遣のしおりの内容としては、①派遣の概要、②渡航前の準備・手続き、③出発～海外滞在中の留意点・心構え、④帰国後～派遣のまとめ、⑤緊急時連絡先リストについて、全員で確認および整理を行った。

## 派遣内容

韓国でのプログラムは10日間の日程で構成され、キャンパスツアーを通してのCAU学生との交流や、CAUの授業およびシミュレーション演習の参加、離島の保健診療所、離島と都市部の保健所、高齢者施設、スキンリハビリテーションセンター、CAU病院等の視察が組み込まれていた。また、CAU学生や施設スタッフとのディスカッションを行う機会も得ることができた。詳細なスケジュールについては表1に示す。

### 1. CAUの概要

CAUは約3万人の学生が在籍する私立の総合大学で、10の学部と16の大学院で組織され、9月入学制を導入している。看護学部は、各学年約300名、学部全体で約1200名の学生が在籍しており、約40名の教員が籍を置いている。特徴的な看護教育として、専門の役者が演技を行う「模擬患者」を用いたシミュレーション教育、先輩学生が後輩学生に教授を行うモニタリングプログラム等が行われていた。特に、海外支援協力チームなどで活躍できる人材の育成等、グローバルリーダーシップを備えた看護師の育成に力を入れているとのことであった。

キャンパスには、講義棟やサークル棟、国際学会が行われるほど大きなホール、図書館、サッカー場、大学のシンボルである青龍の像、広大で坂の多い構内を走るバスや寮を視察することができた(写真1)。派遣プログラムの日程がCAUの夏休み直後であったこともあり、室外の学生数はまばらで飲食店の約半数は閉店状態であったが、図書館やサークル棟内には多くの学生が見られ、開いているお店には学生や家族連れのお客が見かけられた。

### 2. 江華島の保健所視察

江華島の保健所では、保健福祉部の事業が展開され、平日は看護師や栄養士による健康教育が行われていた。具体的には、運動や喫煙、栄養に関し、住民の行動変容を促すことに焦点を当てた健康教育が行われ、訪問サービス、予防接種、自殺予防対策、マラリア対策、健康診査、肥満対策、がん予防キャンペーン、貧困対策等、様々な事業が行われていた。禁煙指導の部屋では、喫煙者の肺のモデルやタバコが瓶詰めされたタールの瓶が展示され、栄養指導の部屋では、食品サンプルや塩分量を可視化した展示があり、視覚で来訪者の健康行動を促すための工夫がされていた。

江華島地区は一人暮らしの高齢者の自殺率が高く、小学校教育からの自殺予防に関する健康教育および抑うつ症状の強いものに対する訪問サービスが行われていた。江華島は北朝鮮の国境に近く、北朝鮮からの蚊が越冬してマラリアを媒介していること、地区の40%は農地で蚊が生息しやすい環境にあり、マラリア対策として噴霧器による蚊の殺虫を行うことについて説明が行われた。さらに、貧困により受診ができない子供が地域の課題となっており、国の支援制度を利用した貧困対策の取り組みが行われていた。

施設内には、歯科施設や、東洋医学を専門とする医師の診療所や健康センターがあり、健康センターでは、一次予防や合併症予防に関する事業が展開されていた。韓国は日本と比べ、歯科医院が少なく、歯科治療に対する住民のニーズが高いこと、高齢化に伴い、健康百歳事業が展開され、病院や保健所へ移動できない住民に対し、訪問診療や訪問看護サービスが提供されていることについても説明がなされた。

### 3. 江華島の保健診療所視察

韓国の保健診療所は、へき地のみを設置されている保健所管轄の診療所で、保健診療員1名が勤務している。保健診療員は保健診療所に常駐して診療を行う看護師であり、約70種類の薬剤の処方権を持ち、地域のかかりつけ看護師の役割を果たしている<sup>8,9)</sup>。

今回訪れた江華島の保健診療所(写真2)は、約1000人の地域住民を対象に、感冒症状や高血圧に対する診療および熱中症対策を主に取り組み、独居老人や慢性疾患を持つ患者に対し、訪問診療や月に一度の健康教育を行っていた。保健診療員は、地域住民との信頼関係を構築するために、地域の行事に個人的に参加するなどの工夫をされており、受診に来た住民と親しげに話をする姿からも、培われた地域住民とのつながりを確認することができた。また、診療室内には、処方した薬を梱包する機械があり、診療から処方までを効率的に行う工夫がな

されていた。さらに診療所内には、生活スペースが併設されており、住民とともに生活をしながら仕事を行うべき地ならではの看護師の活動を視察することができた。

学生は、CAU 学生を含めた学生間のディスカッションで、看護師が処方権を持っていない日本の状況と韓国の保健診療員の取り組みを比較し、処方権を持ち自律して活動を行う看護師の存在が、日本の無医地区の医療を支える存在となる可能性を見出していた。

#### 4. 銅雀区の保健所視察

ソウル市は25地区に区分され、それぞれの地区に担当の保健所が設置されている。今回、視察をした銅雀区の保健所は、約40万人の住民を対象としていた。保健所内は休憩スペースや図書、木製の椅子や机が設置されており、地域住民が保健所に足を運びやすい工夫がなされていた。また、母子保健対策、訪問サービスや自殺予防キャンペーン、健康相談、予防接種、認知症対策等の様々な事業が行われ、認知症対策については、75歳以上の高齢者を対象に、法律に基づく認知症の無料スクリーニングが行われていた。学生は、CAU 学生を含めた学生間のディスカッションにおいて、日本における認知症スクリーニング事業の展開の必要性とその効果について捉えていた。

また、保健所で訪問サービスに関わる看護職となるには、公務員試験に加え、専門教育を受ける必要があることや、訪問サービスは主に高齢者や小児に対して行われ、介護保険の対象者は65歳以上の中～重度の高齢者であることについても説明がなされた。しかし、今回は、実際の訪問サービスを視察する機会には恵まれなかった。

#### 5. CAU でのシミュレーション教育体験

臨地実習の演習施設である大学内のスプリングセンターでは、吸引や点滴作成といった看護技術だけではなく、手術室や集中治療室での看護や出産場面での看護といった、実際の臨床現場を模した演習を可能とするシミュレーション教育が行われていた。加えて、処置室、NICU、訪問看護室、総合看護実習室、会議室等の設備が備えられ、実際の病棟と同様の物品の配置がなされていた。CAU の看護学生は3～4年次生で計1000時間の演習を行うこと、基礎実習室の各部屋は左右4ベッドずつの計8台のベッドが配置されていること、韓国では一般的に1病室8ベッドの作りとなっていることについて、説明がなされた。

シミュレーション教育の実際について、本学学生6名は出産時の看護をシミュレーションできる部屋で演習を行った。この部屋はマジックミラーで2つに仕切られて

おり、片方はベッドとベッド上に妊婦の模擬人形（以下人形と略す）があり、生体情報を表す画面が備え付けられていた。もう片方は、人形の表情や声および生体情報を操作するモニタールームとなっており、学生に指示を与えるマイクもあった。本学の学生は看護師役、人形の操作役、観察・評価役に役割を分担し、人形がある部屋とモニタールームにそれぞれ分かれて演習を行った。人形がある部屋から観察を行うと、人形の心電図波形やSpO2モニターの値が画面に表示され、出産の経過と共に、その値が変化していった。モニタールームの操作により、出産の進行と共に、人形の発声や表情、バイタルサインの変化が見られた。看護師役の学生は人形から胎児の模擬人形を取り出すまでの間、患者の生体情報の観察や患者のフィジカルアセスメントに努めていた。演習後は、CAU 教員による人形を使ったフィードバックがなされ、患者への声掛けや羊水のリトマス紙検査を含めた経膈分娩の一連の看護の役割を確認し、学生全員でフィードバック内容を共有できていた。また、良かった点や悪かった点などを述べ合うディスカッションの場にもなっており、学生同士で学びを深める機会となっていた。また、学生は妊婦の腹部の重さを体験できるジャケットを着用し、妊婦体験も行った。足元が見え辛いことや立ち上がりが困難であること、腰に負担がかかること等、実体験による学びを深めていた。

シミュレーション演習後は、通常、シミュレーション演習中の学生の看護展開を録画した映像をもとに、別室で教員と学生が振り返りを行い、教員がフィードバックを行うとのことであった。しかし、視察日は夏休み直後であったため、韓国の看護学生に対する実際の振り返り場면을視察することはできなかった。学生は、学生間のディスカッション内で、シミュレーション教育は臨床現場と教育現場のギャップを少なくする効果的な教育方法であると捉えていた。

#### 6. 高陽市の高齢者施設視察

Seoul Senior Gavang Tower は、1998年に設立された有料老人福祉住宅で、日常生活に支障のない60歳以上の高齢者を入居対象とし、世帯数は350で、1名の医師と3交代勤務の10名の看護師が勤務している。別の棟には、日常生活の援助が必要な高齢者専用のフロアがあり、看護師が24時間常駐している。施設内には、リハビリテーションやデイケアセンター、老人療養病院があり、定期回診や往診サービスも行われていた。利用者が居住する部屋には表札があり、室内には生活家電や家具、ナースコールが設置されていた。廊下は転倒予防のため、滑りにくい加工がなされ、エレベーター前には椅子が設置され、利用者のADLを配慮した設計がなされていた。ま

た、施設には快適な生活を営めるよう、ビリヤード台や美術品の製作ができる部屋、映画館やコンサート会場、食堂、仮眠部屋があり、利用者のQOLを高める工夫について学ぶことができた。学生は、CAU学生を含めた学生間のディスカッションにおいて、対象者が安全安楽にその人らしく生活するためにどのような支援が必要か考えることでできていた。一方、今回は設備の視察がメインであったため、職員がどのように居住者と関わり、彼らのニーズを知り、ケアに還元していくかについて学びたいという要望が挙がり、今後の派遣プログラムにおける検討課題とした。

## 7. スキンリハビリテーションセンター視察

ソウル市内にある看護師が開業した施設で、看護師3名が勤務されていた。スキンリハビリテーションとは、火傷などの瘢痕や皮膚移植した皮膚の色調を元に戻すために行うケアであり、500円玉を皮膚に乗せた程度の圧力で優しくなでるようにマッサージを行う手技が必要となる。診察費用は、皮膚面積当たりの価格となっており、看護師が開業するスキンリハビリテーションの施設は韓国でこのセンターのみとなっていた。建物は廊下を中心に、左右に部屋がある作りになっており、床は木目を基調とされていた。このセンターの主な診療対象は、火傷を負った乳幼児から高齢者および兵役中に負傷した軍人であり、一日に約30~40名が受診に訪れていた。実際に診療を見学することはできなかったが、受診者はカウンセリング後、状態に沿ったリハビリマッサージやリンパマッサージおよびスキンケアセンターが開発したスキンケア用品を用いた診療を受けていると説明がなされた。韓国は日本には存在しない兵役という制度や、チゲ(鍋)等の熱い食品を嗜好する習慣により、火傷で受診する人が多いとのことであった。

診療環境について、患者がリラックスできることに重点をおき、診療にエスティックやアロマセラピーを取り入れる工夫が行われていた。また、看護師はあたたかい心で愛を込めてマッサージを行うことを信条にしており、あたたかい心で接するという姿勢に日本と韓国の看護における共通点が存在するとして、学生は学生間のディスカッションで、その心情を学びとして受け止めていた。さらに、皮膚ケアに関する看護師の開業は日本では存在せず、文化の違いにおける看護師の働き方と裁量の違いについて関心を持っていた。

## 8. CAU 病院視察

CAU病院は1968年に設立された836床の総合病院で、医師151名、看護師566名が勤務し、患者の平均在院日数は10日で、1日3000人の外来患者があり、ダヴィンチ手

術やゲーム中毒患者の治療を行っている等の説明がなされた。また、2018年には、看護対応による顧客満足度が6部門中5部門で1位となっていた。この看護師の働きが可視化され、患者の病院選択の資料の一つとなっていることについては、日本に無い特徴の一つであった。患者は世界各国から訪れ、国際診療センターでは、外国人患者を対象として医療サービスの提供が行われていた。そこには、複数の言語を話すことができる看護師が配置され、食事は、ロシア、モンゴル、米国、韓国の食文化に合わせたメニューが準備されていた。ハッピーコールと呼ばれる退院後の電話での相談サービスで、薬の飲み方や次回検査の日時のお知らせも行われていた。

学生は Intensive Care Unit (以下 ICU と略す) と Emergency Room (以下 ER と略す) を視察した。ICU では、患者誤認防止のための患者専用の薬カートがあり、薬の保管および患者のベッドサイドでの調剤が行われていた。日本でよく行われている誤認防止のダブルチェックは行われておらず、薬剤をバーコードで管理することで、誤投与を防いでいた。

ER では、患者搬入時、医師、看護師、放射線技師など10名程度が集まり、問診や観察および処置を行いながら、それぞれの立場からの見解を述べ合い、アセスメントを集約し、治療方針の検討が行われていた。また、患者搬入時はセンサーで体温を測り、38度以上の患者は別ルートで搬入するといった、感染予防対策もなされていた。加えて、患者搬入時の特徴として、患者はAを最も重症とする、ABC区分が重症度によってなされ、小児については、別区分で管理されていた。ER内の患者付き添いについては、原則一人であるが、小児は二人まで可能となっていた。さらに、ERにおける平均在院時間は10時間以内に退院、もしくは他科へ転棟するシステムとなっていた。

学生間のディスカッションでは、患者搬入時に各専門職の立場から治療について意見を述べ合う場面を視察できたことが、医師の診察を受けて、医師の指示の下に診療の補助を行うという日本の外来看護の在り方について考え直すきっかけとなっていた。

## 9. 鹿児島文化と学びの発表

一クラス40名ほどで構成された、看護4年次生のがん看護の講義に参加し、約15分間で鹿児島と鹿児島大学の紹介とこれまでの派遣の学びについて、パワーポイントを使用し、プレゼンテーションを行った(写真3)。鹿児島については、鹿児島市PRムービー「維新 dancin' 鹿児島市」を使用し、派遣での学びは派遣中に撮影した写真に合わせて韓国語でプレゼンテーションを行ったため、CAUの学生にわかりやすく伝えることができてい

た。質疑応答も活発になされ、鹿児島大学保健学科のカリキュラムおよび、理学療法士と作業療法士の役割の違いについて質問があった。

### 派遣を通じての考察

派遣後に提出された学生の報告から、海外派遣の目的別に以下の学びを確認した。

#### 1. ルーラルナーシング

学生は、韓国の離島で処方権を持った看護師である保健診療員が、日本のかかりつけ医に似た役割を果たしていることを見聞し、日本の地方や離島地域といったルーラル地区で自律した活躍が期待できる看護師の役割について学ぶことができていた。また、地域住民との信頼関係を築くために、地域の行事に足を運ぶ姿勢や、地域住民の役に立ちたいと思う信念の大切さを捉えることができていた。

地域の活性化については、まず、住民のニーズや地域の活動の内容、実態を整理すること、そして、本国だけではなく、他国の状況を理解することでグローバルな視点を養い、多面的な捉え方を広げていくことが地域に貢献する手段となることについて、考察することができていた。

#### 2. グローバルリーダーシップ

学生は、海外の人々に提供される看護や関連施設を視察することで、看護は様々な国籍、年齢、文化、人種、価値観を持った人を対象としていることや、世界の人々の健康について考える必要性を認識し、学生自身の役割について考察することができていた。同時に、日本で外国人患者に看護を提供する機会が増えている実情についても議論を行い、英語を使ったコミュニケーションと医療英語の理解が現在進行形で必要とされていること、日本においてもグローバルな視点で人々の健康を捉えることの重要性について考えることができていた。また、韓国での学びを内面化して他者に発信することや、今後の活動に活かしていくことが、日本の看護の発展に寄与するために必要なことであると気づくことができていた。世界の地域や住民のニーズの特色を知ること、世界情勢に関心を持つこと、他国と共同で研究等の活動を行うことがグローバルリーダーシップに寄与できるという仮説を立てることができていた。

#### 3. 異文化理解

学生は韓国の文化や看護を知ることで、日本の文化や看護の特徴について改めて理解を深めるきっかけとなっており、異文化理解が本国文化の理解にもつながること

に気づくことができていた。また、通訳を挟んでの異文化理解は通訳者を介在することで対象者の捉え方に偏りが出てきてしまうため、「現地の人と直接コミュニケーションをとり、異文化を解釈する意義」について理解することができていた。加えて、文化や価値観、考え方の多様性を学ぶということは、インターネットの情報を得ることではなく、実際に現地へ赴き、知見や考えを深め、現地の人の温かさを実感し、信頼関係を構築することと捉えていた。

学生は、異文化交流を経験する中で、本国と異なる言語で考えや情緒を伝えることの大切さや、伝わるという喜び、そして、お互いの考えが共有できてこそ有意義な交流であること、意見交換し合う中での発見に価値があることについても捉えることができていた。

### 派遣後の活動

#### 1. 報告書の作成

学生は帰国後、「留学後に実感する学生自身の変化」や「留学後の語学力・成績、海外留学支援のための奨学金に関する報告書」の作成および「研修を通じて学んだこと」を自由記述でまとめた。

#### 2. 学内での派遣報告会

令和元年12月24日12:15～12:45、本学構内で派遣報告会を行った（写真4）。1年次生と2年次生を主な対象とし、両者が正規授業後に参加しやすい教室を会場とする工夫を行った。加えて、構内のエレベーターや廊下に派遣報告会を広報するポスターで開催日時と場所およびランチョン形式の報告会であることを明示し、報告会参加者のリクルート活動を行った（写真5）。派遣報告会の聴講者は計40名で、「海外派遣に参加してみたい。」「海外派遣に必要な予算はいくらか知りたい。」等の感想や意見を得ることができた。

#### 3. シンポジウムでの派遣報告

令和2年2月11日14:00～17:00、学部を超えた学生主催のシンポジウムが本学構内で開催され、本学の本事業8コースのうち7コースの学生がそれぞれ活動内容と学びを報告し、ディスカッションを行った。本コースで韓国に派遣された学生は米国に派遣された学生と共にスライドを作成して発表を行った。また、シンポジウムでは、台湾の国立中興大学の教授による特別講演が行われた。

### おわりに

本海外派遣を通して、学生はルーラルナーシングおよびグローバルリーダーシップ、異文化理解を学び、さら

に、医療者と対象者が直接関わる場面をより多く視察し、対象者のニーズや医療者のケアについて学んでいきたいという向上心を抱くようになっていた。今後は、学年の早い時期から英語の学習と本学での学生交流への参加を促し、学生の国際コミュニケーション能力の向上を目指すことが課題である。学部からの地道な国際交流活動の積み重ねが、将来国際社会でリーダーとして活躍できる看護職を育成する可能性につながると思われる。

## 文献

- 1) 八代利香, 松成裕子, 李笑雨: 鹿児島大学学生海外研修支援事業の報告—韓国の Chung-Ang University および保健診療所の訪問活動—. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 2012; 22 (1): 1-6
- 2) 中尾優子, 八代利香, 津留見美里, 他: 鹿児島大学学生海外研修事業の報告 (助産学コース大学院生): 韓国での産後ケアセンター, 母乳育児支援センター訪問とプレゼンテーション体験. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 2015; 25(1): 19-24
- 3) 山口さおり, 稲留直子, 八代利香, 他: 学生海外研修における大学教員の役割と今後の課題. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 2016; 26(1): 73-81
- 4) 益満智美, 石橋絵里, 伊藤成美, 他: 韓国中央大学校赤十字看護大学との交流における学生の学び: OJO スキンリハビリセンター訪問, シミュレーション授業参加を通して. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 2017; 27(1): 79-85
- 5) 清水佐智子, 益満智美: 韓国におけるホスピス緩和ケア研修報告 Seoul St. Mary's Hospital Hospice & Palliative Care Center 見学を通して. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 2017; 27(1): 87-92.
- 6) 山本直子, 水野昌美: 平成29年度学術交流協力締結校学生交流プログラム参加報告—韓国中央大学校赤十字看護学との交流—. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 2018; 28(1): 47-53
- 7) 特定非営利活動法人 健康都市推進会議: 健康の社会的決定要因 (第二版), <http://www.tmd.ac.jp/med/hlth/whocc/pdf/solidfacts2nd.pdf>, 2020, 1, 18
- 8) 八代利香, 桜井礼子, 平野互, 他: 韓国における看護師の地域社会での活躍. 保健の科学 1999; 41: 153-156
- 9) 八代利香, 金順子: 韓国における専門看護師. 看護教育 2007; 48(10): 909-914

表1 Global Nursing Student Exchange Program

Date	Time	Program
8.21 (WED)	13:35	Arrive at the Incheon Int'l Airport Check in at the Guest house (Blue Mir Hall) Dinner
8.22 (THUR)	8:00 ~ 9:00	Breakfast at Blue Mir Hall restaurant
	9:30 ~ 10:00	KU Professors: Meeting with the Dean
	10:00 ~ 11:30	Introduction: CAU Red Cross College of Nursing Tour #1: College of Nursing & Simulation Center-(BULD 103 & 102, 7th Fl. Center for Simulation Practice in Nursing)
	11:30 ~ 12:00	Introduction: Kagoshima University professors and students
	12:00 ~ 14:00	Welcome Lunch at University Club
	14:00 ~ 16:00	Tour #2: Chung-Ang Univ. (CAU) Campus
	16:00 ~	Cultural Experience with CAU students
8.23 (FRI)	9:00	Depart to Ganghwa Island
	11:00 ~ 12:00	Public Health Center
	12:00 ~ 13:00	Lunch
	13:00	Depart to Sukmo Island
	13:00 ~ 15:00	Public Health Post
	15:00 ~	Sightseeing
8.24 (SAT)		Free/Cultural Experience
8.25 (SUN)		
8.26 (MON)	10:00 ~ 11:30	Dong-jak Public Health Center
	12:00 ~ 13:30	Professors: Lunch Research Seminar Students: Lunch with Buddies
	14:00 ~ 16:00	Attending Simulation Class
	16:30 ~	Students: Cultural Experience
	17:30 ~	Professors: Dinner with CAU Professor
8.27 (TUE)	10:00 ~ 12:00	Seoul Seniors Gayang Tower
	12:00 ~ 14:00	Professors: Lunch with CAU Professor Students: Lunch with Buddies
	14:00 ~ 16:00	Skin Rehabilitation Center
	16:00 ~	Cultural Experience
8.28 (WED)	10:00 ~ 12:00	Welcome by President of CAU Hospital Students Self-introduction CAU Hospital introduction
	12:00 ~ 13:30	Students: Lunch at the CAU Hospital restaurant Professors: Lunch with CAU Professor(s)
	13:30 ~ 15:30	Students: Clinical Practice at CAU Hospital
	16:00 ~ 17:00	Debriefing for the Hospital Practice
	17:00 ~	Cultural Experience
8.29 (THUR)	11:00 ~ 12:00	Attending Lecture
	12:00 ~ 14:00	Lunch and Farewell
	16:00 ~	Cultural Experience
8.30 (FRI)	11:00	Depart to Incheon Airport



写真1 学内オリエンテーションの様子



写真3 鹿児島文化と学びの報告の様子



写真2 江華島の保健診療所



写真4 派遣報告会の様子

**2019. 国際看護学 海外研修報告会**

**DATE** 2019年12月24日(火)

**TIME** 12:15~12:45

**PLACE** インテリジェント教室

私たちの ヘリア大学(USA)&中央大学(ソウル)との  
10日間にわたる研修の物語



お昼ご飯を食べながら聞いてください♡  
出入り自由です！  
楽しい話が盛りだくさん♡

**どなたでもご自由にご参加ください!**



写真5 派遣報告会開催案内ポスター

# **Report on the 2019 Inter-University Exchange Project: Outcomes of Student Exchange Overseas Training with the Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University**

NISHIMOTO Daisaku<sup>1)</sup>, YATSUSHIRO Rika<sup>1)</sup>

1) Department of Fundamental and Clinical Nursing, School of Health Sciences,  
Faculty of Medicine, Kagoshima University

Address correspondence: NISHIMOTO Daisaku  
8-35-1, Kagoshima City, 890-8544, Japan  
Phone/FAX +81-00-275-6760  
Email daisaku@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

## **Abstract**

As part of a project launched by Kagoshima University in 2019 entitled “Inter-University Exchange Project”, six students and two faculty members were dispatched to the Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University in South Korea. Though this overseas training aimed to strengthen an understanding of nursing across cultures, the students were able to gain insights into the following issues : i) Rural nursing, ii) Global leadership, and iii) Understanding of different cultures. The present paper reports on the detailed outcomes of achievements concerning these issues.

**Keywords:** South Korea, Rural nursing, Global leadership, Cross-cultural understanding, Health care system